

詩と官能

寺田寅彦

青空文庫

清楚せいそな感じのする食堂で窓から降りそそぐ正午の空の光を浴びながらひとり静かに食事をして最後にサーヴされたコーヒーに砂糖をそつと入れ、さじでゆるやかにかき交ぜておいて一口だけにする。それから上着の右のかくしから一本煙草たばこを出して軽くくわえる。それからチョツキのかくしからライターをぬき出して顔の正面の「明視の距離」に持つて来ておいてパチリと火ぶたを切る。すると小さな炎が明るい部屋へやの陽光にけおされて鈍く透明にともる。その薄明の中に、きわめて細かい星くずのような点々が燦さんら

爛^んとして青白く輝く、輝いたかと思つた瞬間にはもう消えてしまつてゐる。

この星のような光を見る瞬間に突然不思議な幻覚に襲われることがしばしばある。それはちよつと言葉で表わすことのむづかしい夢のようなものであるが、たとえば、深く降り積もつた雪の中に一本大きなクリスマス・トリーが立つていてそれに、無数の蠟^{ろう}燭^{そく}がともり、それが樅^{もみ}の枝々につるしたいろいろの飾りものに映つてきらめいている。紫紺色に寒々とさえた空には星がいつぱいに銀砂子のように散らばつてゐる。町の音楽隊がセレナーデを奏して通るのを高い窓からグレーチヘンが見おろしている、といったようなきわめて甘いたわいのない子供らしい夢の中からあら

ゆる具体的な表象を全部抜き去ったときに残るであろうと思われるような、全く形態のない幻想のようなものである。

天氣が悪かったり、食堂がきたなかつたり、騒がしかったり、また食事がまずいような場合には、同じライターの同じ炎の中に同じような星が輝いても決してこうした幻覚が起こらないから不思議である。

胃の腑ふの適当な充血と消化液の分泌、それから眼底網膜に映ずる適当な光像の刺激の系列、そんなものの複合作用から生じた一種特別な刺激が大腦に伝わって、そこでこうした特殊の幻覚を起こすのではないかと想像される。「胃の腑」と「詩」との間にはまだだれも知らないような複雑微妙の多様な関係がかくされてい

るのではないかと思われる。

二

いつか夏目先生生前のある事からについて調べることがあつて小宮君こみやと自分でめいめいの古い日記を引っぱり出して比べたことがあつた。そのとき気のついたのは自分の日記にはとかく食いものの記事が多いということであつた。先生とどこで何を食つたというようなことがやたらに特筆大書されているのである。

自分の子供たちのうちにも、古い小さい時分の出来事をその時に食つた食物と連想して記憶しているという傾向の著しく見える

のがいる、どうも親爺おやじの遺伝らしいということになっているのである。

近ごろ、夕飯の食卓で子供らと昔話をしていたとき、かつて自分がN先生とI君と三人で大島おおしま三原山みはらやまの調査のために火口原にテント生活をしたときの話が出たが、それが明治何年ごろの事だったかつい忘れてしまつてちよつと思ひ出せなかつた。ところが、その三原山みはらやま行きの糧食としてN先生が青木堂あおきどうで買つて持つて行つたバン・フーテンのココア、それからプチ・ポアの罐かんづ詰めやコーンド・ビーフのことを思ひ出したので、やつとそれが明治四十二年すなわち自分の外国留学よりは以前のことであつて帰朝後ではなかつたことがわかつた。なぜかという、洋行前に

はそんなハイカラな食物などは存在さえも知らなかったのを洋行
帰りのN先生からはじめて教わりごちそうになり、それと同時に
いろいろと西洋の話などをも聞かされた。そのためにこれらの食
物と、まだ見ぬ西洋へのあこがれの夢とが不思議な縁故で結びつ
いてしまったのであった。一日山上で労働して後に味わったそれ
らの食物のうまかったことは言うまでもない。

そのテント生活中にN先生に安全剃^{かみそり}刀でひげを剃^そってもらっ
たのを覚えている。それは剃刀が切れ味があまりよくなって少し
痛かったせいもあるが、それまで一度も安全剃刀というものの体
験をもたなかったためにそれがたいそう珍しく新しく感じられた
せいもあるらしい。その剃刀が先生のゲッチンゲン大学時代に求

めた将来ものだといっているのでいっそう感心したものらしい。

とにかく、もし自分の留学後だったらバン・フーテンや安全剃刀にも別に驚かなかったはずであるから、それでこの三原山生活の年代の決定が確実にできたわけである。

このときの三原山生活は学問的にもおもしろかったがまた同時に多分の美しい詩で飾られていたようである。しかも、自分の場合にはそれらの詩がみんな自分の肉体の生理的機能となんらかの密接な関係をもっていたような気がする。

どうも自分の詩の世界は自分のからだの生理的機能と密接にか
らみ合っていて直接的な感官の刺激によつてのみ活動しているの
はないかという気がするのである。これはあまり自慢にならない
話のようである。しかし詩人の中にもいろいろの種類があつて、
抽象的精神的な要素の多い詩を作る人がある一方ではまた具象的
官能的な要素に富んだ詩に長じた人もあるようである。自分の見
るところでは、俳人芭蕉ばしょうなどはどちらかと言えば後者に属する
のではないかという気がする。もしそうだとすると、官能的であ
るといふこと自身がそれほどいけない事でもなさそうである。

科学的にもやはり抽象型と具象型、解析型と直観型があるが、
これがやはり詩人の二つの型に対応されるべき各自に共通な因子

をもっているように見える。

詩人にも科学者にもそれぞれの型について無限に多様な優劣の段階がある。要は型の問題ではなくて、段階の問題だけであるらしい。

(昭和十年二月、渋柿)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第五卷」岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年11月20日第1刷発行

1963（昭和38）年6月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年9月5日第65刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年2月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

詩と官能

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>